

「“かな”より漢字のほうがやさしい」と言われても、大人には理解しがたいことでしょう。自分たちの教育が“かな”から始まったから、どうしても“かな”はやさしく、漢字はむずかしいという先入観から抜け出せないのです。

「あり」より「蟻」のほうが子どもにとってわかりやすい、という理屈はわかかったとしても、実際に自分の子どもに漢字教育をすると、ためらってしまうことが多いのではないのでしょうか。それは自分が習ってきた固定観念にとらわれているからです。

“かな”から教育するということは、明治時代からずっと続いてきました。もっといえば遠く平安時代には、“かな”は女文字といわれ、男性が書く漢字と違ってやさしいという記述は、『土佐日記』の中にも出てくるのでご存じだと思います。

したがって、小学校に入る前は、せめて自分の名前ぐらいはかなで覚え、漢字は小学校に入ってから習えばいいと思いがちです。しかしこれは大きな間違いで、小学校に入ってからでは遅いのです。脳の働きがもっとも発達する時期に漢字を学習することがいちばん効果的で、かつまた楽しみながら覚えられます。

しかし、一般的にはこのことが理解されていません。もしためらいが残るようでしたら、実際に試してみることです。幼児に漢字と“かな”の二枚のカードを見せて、どちらがよくわかるかを実験してみれば一目瞭然です。

なぜ、漢字のほうがやさしいかというと、子どもの脳には鳩とか蝶、桃という漢字の形が頭の中にそのまま入るのです。公園で鳩を見せて、あれが鳩だよと言って、「鳩」という漢字を見せれば、いっぺんで覚えてしまうのです。「はと」ではなかなか覚えられないのです。

この辺は後で詳しく説明しますが、いずれにしても、この漢字教育は継続することが大切です。頭は毎日使わなければよくなりません。いくら栄養価の高い食べ物でも一か月に一度ではダメなように、脳も今日使ったけれども、明日は使わないというのでは意味がないのです。

幼児期から、毎日コツコツとやっていくのです。一日に一字読めるようになればいいのです。これを三歳の時から始めたとしましょう。毎日続けると、小学校に入学するまでに小学校で習う漢字がすべてわかるようになります。これだけ知っているということは、その後の学習にも大きな差を生むことは明らかでしょう。